
アリアドネのイト

ウラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドネのイト

【Nコード】

N2449T

【作者名】

ウラン

【あらすじ】

アリアドネは糸を垂らす。愛する者への道しるべとして。私の元へ帰ってきなさいと。それは愛する者を絡め捕り、踊らせる。愛の糸は、今なお絡み束縛する。幾千年の時が経とうとも。

糸

・登場人物

ラグナ——救護班

霧川禾槻^{きりかわかつき}——衛生官

アリアドネは糸を垂らす。

愛する者への道しるべとして。私の元へ帰ってきなさいと。
それは愛する者を絡め捕り、踊らせる。

——愛してます。私は、あなたのことを愛してます。

——あなたがいるから私があり、私があるからあなたがいる。

——私はあなたに全てを捧げます。ですから、あなたは私に全て
を捧げてください。

——愛してます。愛しています。

愛の糸は、今なお絡み束縛する。
幾千年の時が経とうとも。

パラドックス

タイムパラドックスを知っている？ と、ラグナは僕、霧川禾槻きりかわ かつきに聞いた。

「えっと、確か、過去へタイムスリップして、本来起こらないはずのことをしてしまうことによって生じる矛盾、とかだっけ？」

概ね正解、とラグナは回答し、どうやって避けることが出来るかと質問を上乗せする。

「未来を変えるようなことをしようとすると、何らかの邪魔が入って結局はできない、って聞いたことがあるよ」

僕の推測に対し、バタフライ効果という説がある、とラグナは言う。

「バタフライ効果？」

本来過去にいないはずの蝶々が羽ばたく。すると、それによって生じる微々たる風が、長期の時間の流れを得て台風を起こしてしまう。そういった時間の経過における差の膨張を差す説、らしい。

つまり、指一本動かすだけでも時が経てば大きな変化になるから、過去へ行って未来を変えないなんてことはまず出来ないとのこと。

「んー、じゃあわかんないや。降参」

未来の青狸型のロボットが、将来子孫に多大な迷惑を掛けてしまう駄目先祖を立派に育てなおす、といったSFがあるらしい。

それに、その駄目先祖の父親が昔、白百合のような少女に出会ったと語り、それを見てみようタイムマシンでその現場に向かう、という話があるそうだ。まあ、その白百合の少女は、実は過去に來ていた自分の子供だった、というオチなのだけれど。

そう、そこが問題、とラグナは論じた。

そもそも、過去に遡らなければ白百合の少女（？）は現れるはずもなかった。だというのに、過去へ行く前から過去が変わっているという矛盾がそこにはある。

そういうことだ、とラグナは言った。言つてのけた。

例え遡った所で、過去は変えることは出来ない。それ以前に、既に変わっているのだ、と。

そこでラグナは沈黙した。それは、これまでの付き合いでわかつた、これで話はおしまい、の仕草。

すると、ラグナは唐突に、僕の額へ人差し指の先を当ててきた。

——この先では、君がどうしたって何も変わらない。

話は終わりだと思ってけど、どうやらまだ続いていたらしい。

——ただ、見ていればいい。

「え？」

そして、彼女はトンつ、と指を弾いた。

——君にはその権利があるのだから。

瞬間、世界は暗転した。

「ねー、どうしたの、その子？」

「そこに倒れていました」

「うーん、となると、脱走未遂の？セカンドちゃんかな？」

「まあ、そんな所でしょう。結局はこの有様ですが、心意気は買います」

「ふむふむ。んで、その子どーするん？」

「取り合えず、救護室に運ぼうかと」

「おー、アリアちゃんやさしい」

シスターズ（前書き）

・登場人物

ラグナ——シスター

きりかわかつき
霧川禾槻——脱走未遂

アリア——シスター

ヨーコ——シスター

そう思ってしまうのはいけないことなんだろう。
それでも僕は、心のどこかで呟いた。

——これは確かに、人間として失敗している。

シスターズ

風が吹き、彼女の白髪が揺れる。

相変わらずの無表情の唇が、微かに蠢いた。

——君には知っておいて欲しい。

いつかどこかの記憶の欠片。

けして古いものではないのだけれど、それはとても懐かしく感じられた。

唇が蠢く。

——私の、本当の名前は……………

「ヨーコちゃんであーっす！」

「…………え？」

目覚めて一番始めに見えたのは、白い天井だった。

頭に柔らかい触感。数秒して枕だとわかった。毛布が体を覆いかぶさっていることにも気づいて、僕は病室か何かのベットに横たわっているのだと無意識に考える。

で、何となしに体を起こしてみると、茶髪を後ろに一束結んでいる17、8ほどの女の人の顔が目に入った。

彼女は起き上った僕に感心したような表情を見せ、軽い笑みを作って陽気に言う。

とまあ、そんな感じで冒頭のようになったわけなんだけど…………。

「名前だよ名前！ あたしの名前！」

「あ、ああ。そうですか」

この茶髪ポニーの女性はヨーコさん、と言っらしい。

「君のお名前は何ていうのかな？」

「ええと、霧川禾槻、だけど」

「んー、成程ー。よろしくね、カツキン」

「は、はあ」

って、アレ？ それ、僕のあだ名？

ちよつと、いや結構やめて欲しいな、それ。

しかし、僕が訂正を始める前に、新たな入室者が現れた。

「あら、目が覚めたようですね」

背まで伸びた艶やかな黒髪。その双眸はヨーコさんと同じ黒だが、しかし彼女はより一層深い漆黒だった。

身には黒い修道服を纏っている。

ありきたりと言つかそのままなんだけど、黒一色、という単語が思い浮かんだ。

彼女が部屋に現れた途端、僕は圧倒されてしまう。

それは彼女が身に纏う漆黒の出で立ちにでも、薄らと浮かべているほほ笑みにでもなく、何か……そう、色で例えるなら真っ白な何かに――

「気分はいかがですか？」

その声でハッと我に返る。

あれ？ 僕、一体どうしていたんだろう？

再び彼女を見ると、特になんともない。

「あまりよろしくはないようですが？」

「……あ、いや。少し考え事をしていただけだよ」

まあ、あまり気にしないでおこつ。

「やつふー、アリアちゃん。どうだったー」

彼女はアリアさんと言っらしい。

てか、ヨーコさんも修道服着てるし。気付かなかった。

「ええ、そちらの？^{セカンド}さんの処遇は決まりました。しばらく監視をつ

けるとのことですよ」

「おー、よかったねー、カツキン。監視付くだけだってよー」

「監視？ それって僕に？」

「うん、そだよー。いやー、よかったねー。脱走しようとしてそれだけなんてさー。あたし達みたいな量産型の？^{ファースト}だと即廃棄もんだよー」

「……うん。あれ？ 話についていけないぞ。」

「あのー、^{ファースト}？ 何？ それに脱走？ 僕、そんなことしたっけ？」

僕がそう尋ねると、ヨーコさんはあちゃー、と口に出して言った。アリアさんは終始ほほ笑んでいるだけだ。

「記憶喪失かな。ドラゴン君、ついにやっちゃったかー」

記憶喪失！？ 何か変な方向にいつてる！ アリアさん、ほほ笑んでないでどうにかして！

「ご愁傷様ですね」

「……えー。というか、記憶喪失が普通に受け入れられるってどういうこと？」

「ああ、精神干渉系の能力を持つ？^{セカンド}がいるんですよ」

アリアさんがフォローを入れてくれる。だから、^{セカンド}？ 何？

「監視は誰がやるのー？」

「私です」

「おお？ アリアちゃんが？ あー、確かに下手な？^{セカンド}とか『a』がやるよりもその方がいいかもねー」

話が見えないんだけど……。

「というわけで、^{セカンド}？ さんには当分私と行動を共にして貰います」

「だってー、カツキン」

何かなんだか……。

というか、そのあだ名ってどうにかならないのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2449t/>

アリアドネのイト

2011年5月21日00時40分発行